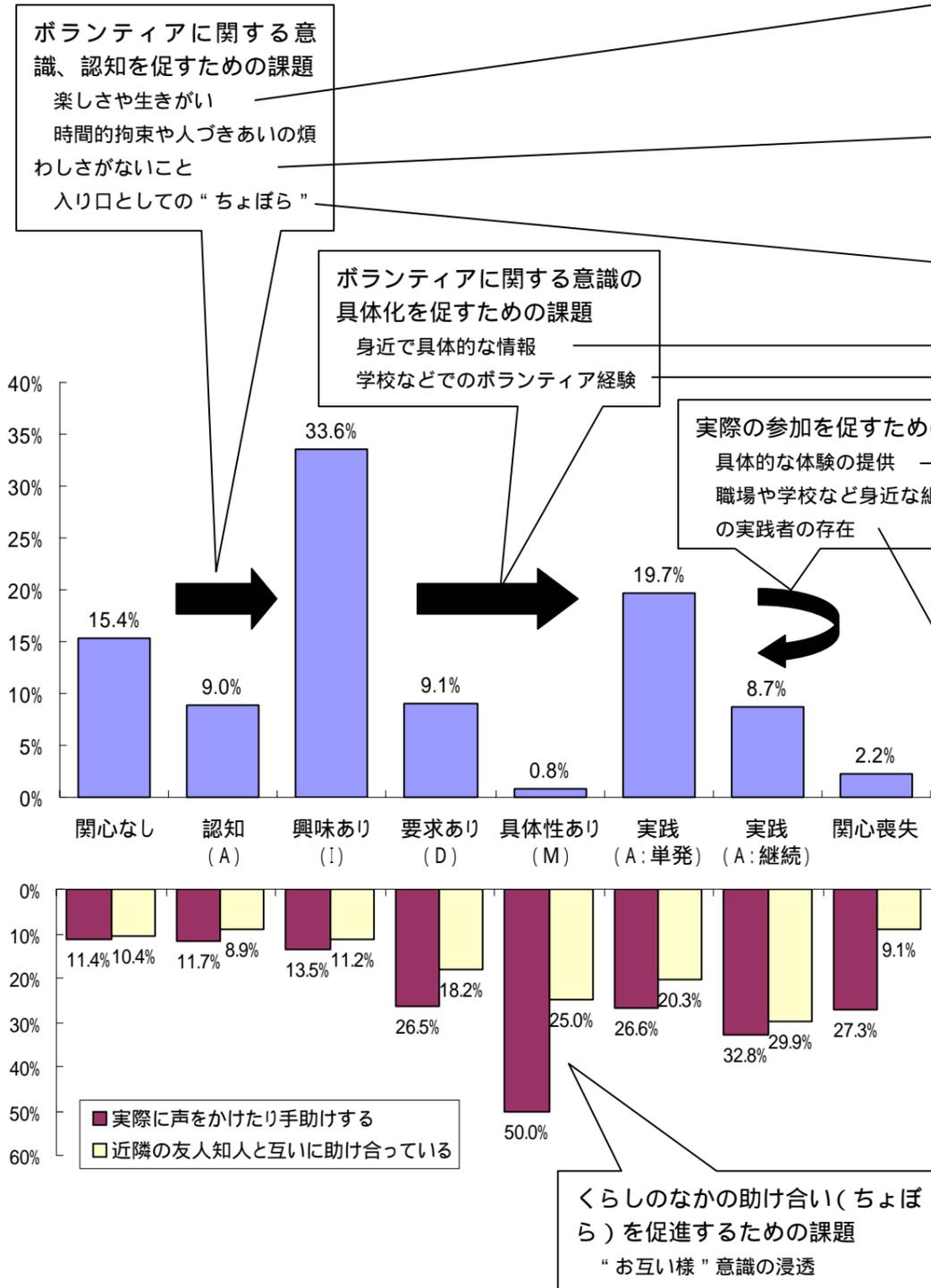


2 3 . ボランティア活動に対するプロモーションのポイント



ポイント

ボランティアの価値（楽しさや生きがいなど）をどのように伝えるか

- ・ ボランティアという行為が責任を伴うという意識が強い中で、それに見合う価値をどのような形でアピールすべきか。

“参加の気軽さ”をどのように創出するか

- ・ 無理のない範囲で活動したい、人づきあいに煩わされない、などのニーズに応えられるボランティア活動にしていくためにはどうするか。

ちょぼらをどのように浸透させていくか

- ・ 人から助けられた経験や地域などでの日頃の助け合いが、困っている他人を助ける気持ちの大きな動機付けになっている。この“お互い様”の意識をどのように醸成していくか。

ボランティアのシミュレーションができるような具体的な情報を、どのように伝達していくか

- ・ 「自分に合った」ボランティア活動やそのための場を、具体的にイメージできないことが、ボランティア参加の大きな壁になっている。こうした状況に対応するための丁寧な情報提供をどのように行えばよいか。

学校などでのボランティアの経験機会をどのようにつくっていくか

- ・ ボランティアを経験することにより、自分のやりたい活動内容などをより具体的に考えるようになる。最初の経験機会は必ずしも自発的なものでなく、例えば学校などが提供してよいと考えられるが、学校が外部機関と連携しどのように機会をつくることができるか。

気軽な参加体験の場をどのようにつくっていくか

- ・ ボランティア実践者は、自治会や学校などに参加体験を与えられたことが有力なきっかけとなっている。人は子どもを持つことによって、子どもを通じた地域との関わりーボランティア参加機会を得る。一方で、特に地域との関わりを深く持たない若年者に実践のきっかけとなるような具体的な機会をどのように提供できるかが重要。

職場や学校などへのボランティアの啓発をどのように行っていくか

- ・ 同じ会社の同僚など身近に実践者がいることは、実践を促進する上で極めて重要なファクターである。このため、会社や学校などに対する啓発を行い、各企業・学校に実践者を生み出し、彼らから周囲の人に波及させていくことは有効と考えられる。